

全科協ニュース

URL <http://jcs.m.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 東京都台東区上野公園 国立科学博物館 ☎110-8718 Tel.5814-9857・9858 Fax.5814-9898 平成13年11月1日発行(通巻第181号)

特集 博物館の評価

日本における博物館の評価の概観

千葉県立中央博物館 生態・環境研究部 上席研究員 牛島 薫

はじめに

1990年代後半に欧米の博物館における評価の手法を始めとした博物館の評価に関する幾つかの文献や研究報告が発表され、2000年以降に各地で博物館の評価にかかるシンポジウムやワークショップが開催されるようになってきた(「博物館を評価する視点」滋賀県立琵琶湖博物館2000年、「博物館における評価と改善スキルアップ講座」東京都江戸東京博物館2001年など)。また、2001年度に一連の国立博物館が中央省庁の行政改革の中で独立行政法人となり、独立行政法人通則法に定められている評価委員会が、各法人の業務の実績等に関する評価を行うこととされており、現在、その評価方法等が検討されている。このような状況下で、博物館の評価の体系とスキルは海外の事例を参考にしながらも、より日本の実情に即したスタンダードを構築することが重要かつ急務であると考えられる。それには、日本における博物館の評価を遡って概観し、現在どのような状況の中で評価が重要視されているかを振り返ることも一つの方法であろう。

では、日本における博物館の評価に関連した研究と実践は、どのような経過を辿っているであろうか。これに関して、戦前から戦後まで日本博物館協会発行の「博物館研究」に掲載された論文を主軸として概観しよう。

1. 1928年以降の戦前

戦前には、1928年発行の博物館研究、第一巻2号にアメリカ博物館協会発行の E. S. Robinson の来館者行動調査についての図書(The Behavior of the Museum Visitor, AAM, 1928)が紹介されている。それ以後の論文・記事で

は、照明効果や解説パネルの認識を博物館関係者や研究者が評価したものは見られるが、来館者の興味や関心、理解度や展示効果を認識して論じたものは、海外の引用のほかはほとんど存在しない。ただし、当時日本の博物館で来館者の視点から照明効果を評価した論文として発表されたものは、1935年の「帝室博物館復興工事の概況」において、照明効果を検証したものがあつた。これは、関東大震災で大破した帝室博物館本館棟を復興改造する際に、昭和12年に竣工した帝室博物館新館(現東京国立博物館の本館)の建設計画において絵画や工芸美術品などを展示するため、自然光の採光の測定値と来館者のアンケートから最適照度について4年間調査して統計処理を行い、高窓式採光法を採用したものである(「帝室博物館復興工事の概況」博物館研究、第8巻(5号)、1935、第10巻(12号)、1937)。

2. 1950年代～1960年代

戦争中、戦争直後は博物館活動も組織を維持することが精一杯であり、来館者の立場での展示や事業開発という視点が生まれるのは1950年代になってからである。1953年に秩父自然科学博物館の新井重三が、展示見学を終えた児童に帰宅途中の電車内で簡単に聞き取り調査して、これを基に「標本個体展示に対する反省」という一文を掲載したものが見学者の立場に立った展示効果について論じた初期のものであろう(「わたくしの博物館学」博物館協会会報20号、1953)。また、博物館の学校教育との連携の中で教育的な評価の必要性を指摘したものとして、1955年に当時、練馬区立石神井西中学の教諭であつた滝善成が、東京国立博物館の小・中学生対象サマースクールの個別テーマ設定に参加

する子供の既習経験を考慮する必要性を指摘し、さらに指導に関する効果を測定評価することについて「博物館側としても、評価の正確なデータを持たなければ、次回への具体的な反省の資を欠くこととなるのではなからうか。」としている（「サンマー・スクール特集 博物館に於ける教育活動の実際」博物館研究、日本博物館協会、通巻第28巻、8/9合併号、1955）。そして、1956年に開催された「第4回全国博物館大会」では、展示に対する興味について調査を行い統計的な考察を試みた幾つかの報告が見られる（「第4回全国博物館大会研究発表」博物館研究、日本博物館協会、Vol.29, 10, 1957）。

これ以降、日本において来館者の調査による展示評価が、その目的と方法論と結果を示して報告されるようになる。

まず、1957年に国立自然教育園の鶴田総一郎によって、「地域社会と博物館との結びつきに関する実態調査」が報告された。これは、地域社会における博物館の位置付けを調査するための方法を開発するために、長野県大町市立山岳博物館に対する、市民の博物館の認知度と意識調査を基に考察されたものである（「地域社会と博物館との結びつきに関する実態調査について」博物館研究、日本博物館協会、Vol.30, 12, 1957）。

このほかに展示効果の評価でも、来館する中・高校生に対して Pre-test と見学中の動向調査および Post-test によって形成的な評価を意識した手法が、国立科学博物館の石田清一、椎名仙卓によって報告されている（「博物館における観覧行動軌跡」博物館研究、日本博物館協会、Vol.37, 2, 1964など）。

また1950年代後半から60年代には、特徴的に博物館の集客や経営を意識した来館者の動向や意識、興味などに関する調査が行われ始める。特に、1963年に日本博物館協会が全国の博物館に「観光施設として」「産業との関わりについて」「友の会について」に關した3つのアンケート調査を行っている（「観光と博物館 アンケート集計結果報告」博物館研究、日本博物館協会、Vol.36, 6, 1963、「産業と博物館 アンケート集計結果報告」博物館研究、日本博物館協会、Vol.36, 5, 1963、「博物館と友の会 アンケート集計結果報告」博物館研究、日本博物館協会、Vol.36, 7, 1963）。

また、この年の9月号は、博物館経営についての特集であり、各界の第一人者に「もし、あなたが館長だったら」というテーマでアイディアの提供を依頼している。その中

で、経営コンサルタントである早川正寿によって、企業的な経営について博物館が取り組むことのできる事項を仮説として挙げて、マーケティングを博物館に導入することを促す論文が掲載されている（「博物館経営の合理化」博物館研究、日本博物館協会、Vol.36, 9, 1963）。

このころには、日本において博物館経営におけるマーケティングや集客における館のイメージ、展示物のイメージなどが企業の観点から意識されていたと思われる論文が見られる。

3. 1970年代～1990年代前半

1970年代から80年代に、アメリカでは博物館における来館者研究が盛んに行われ、またイギリスでは厳しい経済政策を背景に、実践的な来館者研究と評価が進められていた。しかし、日本においては60年代に盛り上がりを見せ始めた経営およびその評価の視点は70年代に少なくとも論文や研究発表の形ではめっきり少なくなる。

1981年、国立民族学博物館において経済学の視点から博物館の地域経済への波及効果が測定された。そして80年代になって、展示設計・施工会社とその関連研究所（「展示評価の調査・研究」日本科学技術振興財団・科学技術館、丹青総合研究所、1987）や大学の博物館学教室（野村東太、博物館學雑誌、第12巻1号、1986）などが博物館と共同して、博物館建設、展示設計や展示学の基礎研究として欧米の手法を基にした来館者研究や経営にかかる評価を始めた。また、学会の創設（全日本博物館学会1975、日本展示学会1982）によって関連論文や報告も日本博物館協会の「博物館研究」から学会誌にシフトした感がある。しかし、学芸員主体による来館者研究や評価報告は比較的少なく（「わかりやすい展示を考える」嶋田忠一、秋田県立博物館研究報告、第10号、1985など）、このような来館者研究や経営の視点が全国規模で認識され、広がりを見せることはなかった。この企業、大学主体の調査や研究の傾向は、バブル経済の崩壊した後の1990年代前半まで続く。

4. 1990年代後半～現在

そして、冒頭に述べた通り1990年代後半から博物館の経営と評価にかかる研究が活発になり（日本ミュージアム・マネジメント学会 1997）、大学や展示設計・施工会社だけでなく、博物館サイドから欧米の来館者研究を基礎とし

た評価（「博物館における評価に関する基礎的研究」日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要、創刊号1997など）、またマーケティングを利用した博物館事業展開とその評価（「博物館の特別展とその教育普及効果に関する研究」金山喜昭、博物館學紀要、第21号、1997など）や行政評価（「公立博物館における行政評価」佐々木享、日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要 第3号、1999など）など博物館の評価に関する研究や論文が次々と報告された。さらに2000年以降、博物館を評価するために開催されたワークショップに学芸員を始めとした博物館関係者が多数参加するという現状がある。

まとめ

この1960年代から70年代にかけての変化、また80年代および90年代前半から90年代後半および現在までの変化の原

因をさらに分析すれば、日本の博物館の持つ経営に対する問題点を浮き彫りにすることができるだろう。（これについては、川嶋・ベルトラン敦子氏と現在調査を進めており、後日別稿としてまとめたいと考えている。）そして、このことによる博物館の経営と評価の現状認識は、日本の風土にあった評価体系とその手法を構築する一助とすることができるのではないかと考える。

なお本稿は、かつて筆者がまとめた「博物館の評価に関する一考察 ―経営の評価を中心として―」（千葉県立現代産業科学館研究報告書第6号、2000）中の『日本の博物館における評価』部分を基としている。特に紙面の都合で、評価の定義や評価と来館者研究（リサーチ）およびマーケティングが異なる点などには触れず、博物館の評価に関連した論文や報告の歴史的な流れを述べるのみとなった。詳細は拙稿に当たっていただきたい。

博物館評価に立ち向かう前に

江戸東京博物館 学芸員 佐々木 秀彦

■博物館評価を整理する

博物館評価が話題になっているが、まだ議論の土台が固まっていないように思える。議論を整理するために、「博物館評価」と考えられることを、あえて「評価」という言葉を使わずに、以下の6つに分けて考えてみた。

ア. 一定の基準による審査

これは博物館の登録制度や認定事業にかかわるものである。博物館として必要な要件を一定の基準をもとに判断するもので、政府あるいは非政府の博物館連合組織である博物館協会が、この基準をもとに審査して登録・認定する。これによって博物館の質と公的責任を保ち、社会に対する博物館の信頼性を確保するのである。

日本には、博物館法による登録制度があり、イギリスでは政府による博物館の登録制度、アメリカでは博物館協会による基準認定事業が確立している。

イ. 設置者による点検

博物館の設置者が、博物館の事業について目標を設定し、到達度を点検するものである。近年、国や自治体が「政策評価・行政評価」を導入しており、その一環として博物館も点検の対象となっている。

ウ. 改善・開発を前提にした検証

博物館がおもに来館者を対象として実施する各種の調査活動で、その結果は各種の活動に反映される。たとえば、展示やその改善をおこなう際に、来館者の反応を検証しながら実施するというものである。これは展示のエバリュエーションと呼ばれるもので、アメリカでは20～30年の実績がある。最近では日本でもこれを導入する動きが出ている。

エ. 博物館自身による点検

各博物館が自らの事業について調査・点検し、今後の改善方向を探るものである。館長以下、学芸員、事務職員、施設・設備の担当者、案内員やボランティアが、課題と今後のあり方を明らかにするというものである。

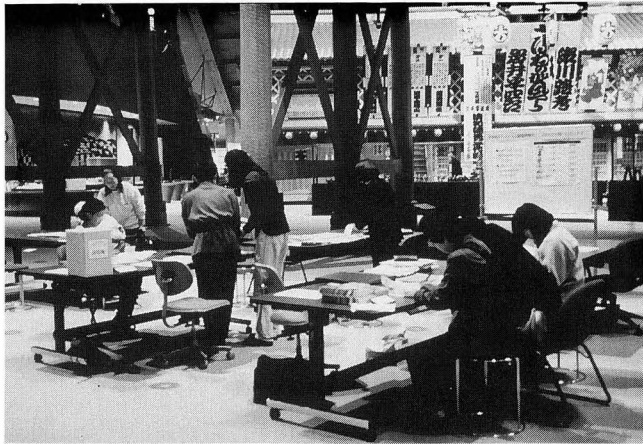
江戸東京博物館では平成9年度から、改善プランを策定するために、常設展示を中心に利用者の実態を把握し、満足度を確かめている。

オ. 専門家による質の批評

展示批評が、この1～2年で盛んになってきた。研究者や学芸員といった専門家が展示の意図や手法について、おもに学術的な観点から批評するのである。

カ. 利用者によるチェック

利用者自身が、利用する観点から博物館の施設や事業、サービス等について点検し、満足度を公表するというものである。



自己点検の一例 アンケート・聞き取り



自己点検の一例 動線・注目率の観察

これらの6つを念頭において、博物館「評価」を考えるとき、私は以下の2点が重要であると考え。一つは、博物館という機関に共通する必要最低限の基準を策定し、審査する仕組みを確立すること。もう一つは、各博物館が目指す方向（＝使命）を明確にして、その達成度を確認することを評価の中心にすることである。

■必要最低基準の確立

博物館は、資料や情報を収集し、整備・保管し、広く公開していく。これらの活動はどの博物館にも共通する。この共通する活動について、各博物館の「品質保証」をするのが一定の基準による登録制度や認定事業である。これは博物館界による社会への説明責任という意味合いを持つ。

日本にも博物館法による登録制度があるが、登録の対象となる博物館が限定されていたり、登録要件が大雑把で、

実態と乖離し形骸化しているといわれて久しい。早急に改善し、現状に合った方法を確立することが求められる。基準は博物館の個性を尊重することを前提とした必要最低限のものとすべきであろう。

■各博物館の使命を明確にする

本来は、そうした登録制度や認定事業が確立した上で、各博物館の評価を行うことが望ましい。必要最低限の基準の先にあること、例えば、何の資料をどれだけ集めるのか。利用者の主たる対象は地域の人なのか、観光客なのか、それとも外国にまで視野を広げるのか。調査研究を最先端の領域に特化するのか、地域に密着した調査をおこなうのか、やりかたはいろいろである。このように博物館活動の個々の局面において、どのような方針を取るのか、これは各博物館の負っている役割（＝使命）に基づいて選択するものである。

このように博物館各々の特色こそが博物館の魅力であり、博物館の多様性を前提にした評価方法こそが求められるのである。つまり評価指標や、達成度の判断は個々の博物館の使命によって異なる。研究重視の国立の博物館と住民重視の地域博物館を同じ評価指標で点検できないし、それぞれの博物館の成果となることも異なる。入場者数ひとつ取っても、研究機能を重視する博物館であれば、地元の利用者よりも国内外を含めた研究者の利用数こそ問われるべきであろうし、地域博物館であれば地元住民の利用頻度のほうが、海外からの観光客よりも大切であろう。つまり博物館を評価するさいには、博物館の目指すことを明確にして、それがどの程度達成されたかをみるのが重要なのである。

ところが、近年の政策評価・行政評価は、入場者数や費用対効果に偏重するきらいがあり、しかも評価指標が総入場者数やチケット収入の総額といったものである。各博物館の使命に合ったものではない。

そして博物館の側にも問題がある。多くの博物館では、肝心な使命があやふやである。設置理念は明文化されていても、資料の収集・保管・展示といったこの博物館でも行う活動を並べているだけのところが多いのではないだろうか。博物館が「ハコモノ」と揶揄されることがあるが、使命が未確立ということは、まさに仏つくって魂入れず。自分たちはどのような役割をはたすのか、何を売り込んでいけるのか、ということが不明確なのである。それが不明

確であるかぎり、博物館の向上に寄与する「評価」にはならない。

博物館評価に対して関係者の多くが、不安や嫌悪、恐れを感じるのも、じつはこの使命の不明確さと、それに伴って関係者の意志が不一致であることに原因があるように思われる。つまり、自分たちが何を目標しているのか、はっきりと打ち出していれば、評価に対して「自分たちはここまでで達成した」「ここは課題であるからこう改善していく」と言えるのである。ところが、目指すものが不明確なために、外部から勝手な評価基準を押しつけられて抑圧されると感じたり、また評価によって組織ではなく自分自身の存在が問われるという不安や恐れを感じてしまうのだ。

■自己点検から始める

博物館を含めた非営利機関における評価とは、本来、使命をどの程度達成できたのかを確認することである。しかし日本の博物館では、その使命が不明確なまま評価が導入されはじめている。だからといって、評価を拒絶したり、逃げまわるのは得策ではない。むしろ、博物館評価の導入をきっかけに、自己点検や現状調査をすることによって自分たちの存在意義が改めて明確になってきて、使命や基本理念の確立につながっていくのである。

現状分析の結果を職員相互が共有すると、それまでお互いを牽制しあうような関係から、客観的なデータをもとに、今後の方向について自ずと建設的な議論ができるように変わっていく。そして博物館の使命を再構築でき、中長期計画の立案にも生かしていけるはずである。こうして博物館活動はかならず向上する。そう私は期待している。

クリエイティブワークとしての“展示評価”

トータルメディア開発研究所 安藤 淳一・重盛 恭一

はじめに

「博物館の評価」に関心が高まっている。いくつかのワークショップや実践を発端に、併せて、経済の低迷からハコモノ批判もあり、博物館の事業を評価する必要性も重なったからだ。本稿は、さまざまな目的やスタイルの幅を持つ「評価」のうち、弊社が参加した全米日系人博物館の「弁当からミックスプレートへ」展の事例から「展示評価」に絞って、日本での課題や展望を述べてみたい。

全米日系人博物館日本巡回展「弁当からミックスプレートへ」展 来館者調査・概要

●期間・場所 2000年11月10日から12月10日／沖縄県立博物館

●名称 「日系移民一世紀」展（以下一世紀展）。第1部「弁当からミックスプレートへ」展（以下弁当展）。全米日系人博物館（JANM企画制作）第2部「沖縄移民の百年史」（以下沖縄移民展。県博側が企画制作）
※本展はすでに米国数ヶ所を巡回済み。沖縄の開催後、日本国内数カ所を巡回する予定。

●調査担当 展示学研究所（トータルメディア開発研究所グループ）

（「弁当展」の来館者調査をJANMから依頼され実施。）

●調査目的 ①米国で企画制作された展示、教育プログラムの文化・社会背景の異なる日本での受け入れられ方、理解や誤解される点の調査。②日本の来館者の感じる過不足や印象の調査。③それらを見極め、展示、教育プログラム両面での改善点の明確化。④巡回期間中に可能な修正を加える提言のまとめ。

●調査内容・形式

・来館者インタビュー；来館動機、満足度、理解度、性別、年齢、観覧時間等を直接インタビュー。
・来館者行動調査；行動観察を行い、平面図上にマッピング。

・アクティビティキット利用状況調査；併用された教育普及キットの利用状況をキットを使って来館者とコミュニケーションしたボランティアスタッフがレポート。

※実施にあたっては、調査中である旨のサインパネルを展示室入口に設置、来館者への周知・理解に努めた。

以上の調査から弊社はJANMに対して改善ポイントの提言を含めた調査報告書を提出し、成果は時間と予算の範囲内で次の巡回先（国立民族学博物館）の展

示に反映された。

【調査の所感(調査担当・安藤淳一／展示学研究所・当時)】

展示評価で重要なのは、館職員・展示会社・ボランティアスタッフ・調査者が、各々の職分・役割を尊重しつつ『展示をより良いものにする』という共通目標に向かって連帯するポジティブな姿勢だ。

本調査ではJANMを中心に、企画から開催中まで様々な場面で有意義な討論が繰り返され、連帯が形成された。その中で調査者はチーム各員を繋ぐ客観的な存在として、連帯を維持成熟させる重要なポジションを担った。

さらに、評価とは調査が目的ではなく、展示の改善が目的であって、そのための予算があらかじめ充たされなくては実施できない。実際に予算があったからこそ(金額の大小ではなく)調査の意味が明確になり、チーム内のモチベーションが高まり、連帯の意義を認識させ続けたのだった。

また、評価では、個人的な思いこみや独善は禁物である。今回の「弁当展」と「沖縄移民展」という2つの展示では、制作国も考え方も手法も異っていたため、2つの展示の来館者の行動や意見を把握する参考調査も行った。当初、多くの来館者が「沖縄移民展」より「弁当展」を支持すると考えた。なぜなら、ケース主体の典型的な資料展示である「沖縄移民展」にくらべ、「弁当展」は、ハワイ日系移民の住宅を模してデザインされた「モジュール」が展示ユニットとして配され、それを巡るように内容構成されていて個性的でわかりやすい展示と思われたからだ。予想は概ね正しかった。が、「日系移民展」のほうが『博物館らしくてわかりやすい』と答えた来館者も2割程いた。今回は「弁当展」の改善が目的であり、これら意見は参考に留められたが、今後別の調査で同様の結果が生じたとき、この2割を少数意見として無視するほどドライに割り切れないと感じた。なぜなら2割の方々は、年に数回は博物館を訪れるいわゆる「博物館ファン」でもあったからだ。『従来のファンを置き去りにした個性や楽しさの追求が、はたして正しい選択か』、そんな疑問を現在も持っている。

このことは“展示評価”の難しさの一端を示す。博物館は、コンビニエンス・ストアのように一定の売

上目標をクリアできない商品を排して、売上のいい商品だけを並べる場ではない。とすれば、今後、同様の状況に直面した時、こうした来館者側の反応をどうとらえ、改善提案を行うべきか。今後の根本的な課題として大きく残されたことなのである。

展示評価の留意点や課題

弊社は、弁当展以外にも展示評価を試みているが多くが進行中で公表できない。以下、弁当展を軸として、展示評価の実際からわかる留意点や課題を整理しよう。

1) 展示評価の目的

展示開発のクリエイティブ・プロセスの一環。展示のコミュニケーション力の評価・改善のため実施される。

展示評価は来館者に調査を行うことから来館者の理解度を試したりテストすることと捉えられるが、これは誤解だ。評価は、来館者を試すのではなく、また、評価だけで独立して存在するものでもない。「より良い展示を開発するために来館者に博物館のメッセージがどれほど届いているか」という、コミュニケーションの成立度合いを測るという、開発プロセスの一環であることを認識しておきたい。

2) 展示評価の体制

評価を行うことは評価調査者だけの独断ではない。チーム全員のチームワークを前提に評価が行われる。

評価の実施では評価調査者のみが特別な存在ではないということだ。開発プロセスの一環である評価は、展示開発チームとしての学芸員・教育担当者・展示開発者(日本では展示会社)・ボランティア、調査者が、各々の役割を持ちつつ、基本的に対等な立場で評価調査の結果を受止め有意義な討議と検討を行うことに意味がある。展示の弱点をチ

美術

はく製

〈各種生物〉
剥製・骨格標本・レプリカ
加工/販売/リース



有限会社 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1 直通 ☎047-337-5678
☎047-337-5883
本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 FAX 047-338-1978
☎047-374-1564

ーム全員が認め、有効な改善策を全員で練り上げることが大切だ。時に展示開発では、一人の学芸員、一人の開発者の思い込みが先行し、失敗することがある。展示評価は、発想側が陥りがちな、そんな“ひとりよがり”を、来館者のあり方を通してたずさることになる。同じ「こだわり」を持つのなら、それはチーム全員に共有されたものでありたい。

3) 展示評価の掲げる大きな目標

展示のコミュニケーション・メッセージが伝わり、豊かな経験の機会を与えるか。展示ごとに異なる目標と流れで多彩な評価軸が構築され、展示の価値が創造されていく。

展示評価に対して、普遍的な評価軸を期待する声も聞く。だが、個々の展示はそれぞれに個性的なコミュニケーション・メッセージを持つので、どの博物館のどの展示にも共通するチェックリストはない。開発側チームの意図としてのメッセージが最初にあり、来館者への伝わり方や来館者の誤解のあり方、意図通りに豊かな経験を実現するかで、段階ごとの展示の価値や意味が判断される。企画段階評価 (Front-End Evaluation) 制作途中評価 (Formative Evaluation) 総括評価 (Summative Evaluation) の各プロセスで、つねにチェックされ、段階ごとに適した方法と軸が考案されるのである。展示開発の一環として、メッセージという展示の価値を高め続けるクリエイティブワークが展示評価なのだ。

おわりに

繰り返し強調するが、展示評価は「クリエイティブワーク」である。自分が考えた展示のメッセージを、チームで

あるメンバーや利用者と共有できるかどうか。他者からの意外な意見を知って「自分はこう思っていたが、そうか!」という創造的驚きがある。さまざまな人の意見や意志や行為に直面し、チームの全員が自分自身の狭い考えを越えて、展示を見直すだけでなく、その博物館のあり方や社会的存在意義を議論することも起る。同じ目的を持つメンバーが、共同でクリエイティブ作業を行うためのより良い雰囲気が生まれる。

まず、現状の日本の体制では、クリエイティブを行う展示開発チームとして、中と外の枠を越えた組織づくりを、われわれ展示会社も博物館も共に意識し、実行する必要がある。外注によって展示が企画制作されることが主流である日本では、それが、何にも増して急がれるのである。

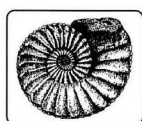


「弁当からミックスプレートへ」展 (沖縄県立博物館)

なお、ご指導いただいた全米日系人博物館の教育部部長の三木美裕さんと、沖縄県立博物館の職員のみなさんやボランティアの方々。そして、調査に参加くださった利用者の皆さんにお礼を申し上げます。

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本 (化石・鉱物・岩石)
古生物関係模型 (レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

●常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

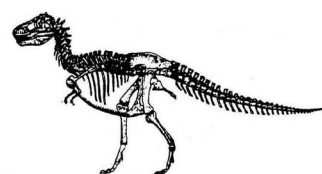
株式会社 東京サイエンス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745

http://www.tokyo-science.co.jp E-mail:info@tokyo-science.co.jp

※世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**
コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802

TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

最先端の OCR 技術を紹介した巡回展が、米国で開催中

アリゾナ科学館で開催中の巡回展『XFR: Experiments in the Future of Reading』(会期: 2001年12月末迄)は、子どもおよび「元子ども」を対象に、最先端の文字解析技術を紹介した巡回展だ。米ゼロックス社のパロアルト研究所によって企画・制作された同展は、パロアルト研究所で開発された最新の OCR (光学式文字認識) 技術を使って、文字情報を読みとり、そして音声情報に変えて、観覧者にもその内容を聞かせるロボット『読む眼をもった犬』(Reading Eye Dog) など、同研究所で開発されたユニークな展示装置が登場している。この夏にシリコン・バレーにあるテック・イノベーション博物館を皮切りに、アリゾナ科学館など全米各地を巡回する予定だ。

参照: www.parc.xerox.com/pressroom/xfr/

テーマパークの舞台裏を紹介した巡回展が、米国で開催中

先頃大阪でオープンしたユニバーサル・スタジオは言うに及ばず、東京ディズニーランドとディズニーシーなどのテーマパークは、周辺にある博物館施設にとって、観覧者の獲得において、間違いなく脅威の存在だ。これは、最初のテーマパークであるディズニーランドが1955年に登場して以来、アメリカにおいても常に問題になっていることであり、競合する近隣の博物館側ではテーマパークといかにうまくつき合うかの苦しい努力が続けられている。一方のテーマパークでは、人気があるアトラクションの背景にある科学やテクノロジーを紹介することは稀である。しかし、ようやく最近になってから、テーマパーク側がそうしたアトラクションの背景にある科学やテクノロジーを紹介することを始め、こともあろうに今まで競合関係にあった科学系の博物館施設で始めたのである。このほどオレゴン科学産業博物館での開催を終えた特別展『Theme Park: The Art & Science of Universal Studios Islands of Adventure』(2001年5月26日-9月1日)は、そうした野心的な試みの一つだ。同展は、テキサス州サンアントニオに本社をもつ米国の代表的な展示制作会社であるBBH社が、ユニバーサル・スタジオの全面的な協力を得て、企画・制作した巡回展である。約800m²の展示スペースでは、ジュラシック・パークに登場する恐竜ロボットが動くしかけをはじめ、観覧者自身がコンピュータを使ってローラーコースターを設

計できる装置や、現代の映画に使われる最先端のコンピュータ映像制作技術に触れることができる。同展は、既にシカゴ科学産業博物館、グラス・サイエンス・プレース、オンタリオ科学館、ピンク・パレス (メンフィス市) で開催され、2001年9月29日から2002年1月6日までヒューストンのヒューストン宇宙センターで開催されている。次の開催館は、サウス・カロライナ州立博物館 (コロンビア市 2002年1月26日-5月5日)

参照: www.oms.edu/calendar/themepark/

6000万年前の巨大ワニを紹介した巡回展が、米国で開催中

今から6500万年前までに地球の生物界に君臨していた恐竜が絶滅し、次の暁新世 (6500万年前~5500万年前) は、哺乳類が発展を始めた時代であり、有袋類、食虫類のほか、霊長類や古型の食肉類が出現した。この中で、最大の食肉類はクロコダイルであり、中には13メートルを超す大物もいたらしい。2001年12月8日からピッツバーグのカーネギー自然史博物館で始まる特別展『When the Crocodiles Ruled』(2002年5月12日まで) は、6000万年前にそれまでの恐竜に代わって、地球に君臨したクロコダイルの世界を紹介するものだ。同展はミネソタ科学博物館によって企画・制作され、同館が25年前から現在に至るまで、ノースダコタ州ワナガン・クリーク・クアリーの暁新世の地層での発掘調査での成果をもとに、6000万年前の地層から発見されたクロコダイルや霊長類と水中に潜むそのほかの食肉類の生態が明らかにされている。約500m²の展示スペースは、3つのコーナーに分かれている。『Welcome to Tropical North Dakota』のコーナーでは、6000万年前の亜熱帯地域にあったノースダコタの蒸し暑い沼地の環境がジオラマとして再現されている。この中でキツネザルに似た霊長類の他、沼地に君臨していたと思われる体長13メートルの初期のクロコダイルである Leidyosuchus が見られる。『World Change Central』のコーナーでは、地質学者や古生物学者がどのように大昔の地層について明らかにしていったかが映像や地質標本を使って紹介されている。『Field Camp』のコーナーは、ワナガン・クリーク・クアリーの発掘現場が再現され、観覧者は現代の発掘現場で、コンピュータを使った最先端の調査技術に触れることができる。また、ここでは山積みになった化石化した骨のレプリカを使って、

それらを繋ぎあわせながら本物の動物を当てるゲームも用意されている。同展は、コッチ・ペトロリウム・グループの全面的な資金協力によって完成し、全米科学基金 (N.S.F.) からの助成も受けている。同展は、サンディエゴ自然史博物館やオレゴン科学産業博物館も巡回することになっている。参照：www.crocsrule.org/siteindex.html

ロンドン自然史博物館、新収蔵センターを2002年に完成

現在ロンドンの自然史博物館で観覧者が見られる標本は、全標本が約7000万点である総点数の1%にも満たないと言われている。このうちの2200万点の動物標本が、2002年9月の完成を予定している新しい収蔵である『ダーウィン・センター』(Darwin Centre)に移されることになっている。新しい施設は、サウスケンジントン街の本館の西隣に接して完成され、総工費の1000万ポンドの大部分は、ウェルカム財団からの寄付だ。2002年9月に完成した後、続けて第二期工事も始められることになっており、2800万点の昆虫標本と600万点の植物標本が2003年の完成後に移されることになっている。この第二期工事の完成によって、収蔵管理される動物標本と昆虫標本および植物標本は一般観覧者に公開されることになっており、またインターネットを通じて公開することも計画されている。このほど、新たにダーウィン・センターのホームページも立ち上がった。

参照：www.nhm.ac.uk/darwincentre/

米ルイスビル科学館に、健康に関する常設展がオープン

ケンタッキー州ルイスビルにあるルイスビル科学館で、このほど総工費760万ドルをかけて、健康に関する新しい常設展『The World Within Us』を2001年3月31日にオープンした。同展では、最新の医学の成果にもとづいて、人間の解剖学、生理学、健康管理、栄養の摂取と正しいライフスタイルをテーマに取り上げている。約1000㎡の展示スペースは、大きく3つのコーナーに分かれている。『BodyWatch』のコーナーでは、ふだん見ることができない人間の循環系、免疫機能、呼吸器系、生殖器官、筋骨格システム、神経系と消化系が紹介されている。『Breakthrough』では、さまざまな最先端医学の医療技術が紹介されており、あわせてそれらの現場に従事している人々の多様な職種をも紹介している。『TimeZone』のコーナーでは、母親の体内にいる胎児の段階から高齢期にいたるまでの各段階において、精神と肉体の発達に見られるさまざまな問題を取り上げている。

参照：www.louisvillescience.org/lscmedia/index.htm

国際宇宙センターを紹介した巡回展が、米国で開催中

アメリカとロシアを中心に、16ヶ国が共同で開発している、国際宇宙センター (ISS) は、2006年に総工費350億ドルから370億ドルをかけて完成する巨大宇宙プロジェクトだ。この宇宙センターの機能と、そこではたらく科学者の活動と生活の様子を紹介した特別展『International Space Station: the Earth Tour』が、米国ノースカロライナ州シャーロットのディスカバリー・センターで、2001年6月16日にオープンした。同展では、宇宙センター内に設けられる機器類を使ってさまざまなシミュレーションが体験でき、宇宙での厳しい生活についての理解を促す映像なども用意されている。ディスカバリー・センターでの開催後、全米各地で巡回されることになっている。ディスカバリー・センターでの会期：2002年1月1日まで。

参照：www.discoveryplace.org/exh_travel.htm

英レスターに、イギリスで初めての宇宙博物館が開館

イギリス中部の都市レスターに、イギリスにとって初めての宇宙博物館『国立宇宙センター』(National Space Centre)が2001年6月30日に開館した。総工費5,200万ポンドをかけて完成した同センターでは、ソユーズ型人工衛星の実物カプセルや国際宇宙ステーションの訓練施設の一部を復元したものが設けられている。またイギリスが1950年代に単独で開発に成功した大陸弾道ミサイルの実物も、持ち主であるリバプール博物館から長期貸与されている。

新しいウェブサイト

Glasgow Science Centre. Glasgow, U.K.

www.gsc.org.uk

Heard Natural Science Museum. McKinney, U.S.A.

www.heardmuseum.org

Lafayette Natural History Museum. Lafayette, U.S.A.

www.lnhm.org

Museu de les ciencias Principe Felipe.

Valencia, Spain. www.cac.es

National Space Centre. Leicester, U.K.

www.spacecentre.co.uk

Naturalis. Leiden, Netherlands

www.naturalis.nl

Natuurmuseum. Groningen, Netherlands

www.natuurmuseum.org

* (やすい・りょう) E-post: RGYasui@obirin.ac.jp

11月12月の特別展

岩手県立博物館

テーマ展「下伊那地方の文化財とその周辺」

9月22日～11月11日

秋田県立博物館

企画展「自然の中の○△□—かたちには理由がある—」

7月29日～11月11日

ふくしま森の科学体験センター

特別展「マグネット展」

11月2日～11日

栃木県立博物館

佐野市郷土博物館と共催

特別企画展「田中正造とその時代—天皇直訴100周年—」

11月1日～12月16日

群馬県立自然史博物館

第14回企画展「火の山—マグマのダイナミックな活動—」

10月6日～11月25日

埼玉県立自然史博物館

特別展「未来に残したい大地の神秘」

10月6日～12月16日

千葉県立現代産業科学館

特別展「スペース21・宇宙への招待」

10月6日～11月25日

鴨川シーワールド

特別展「上手に子育て」—魚介類の稚魚育成—

7月8日～11月30日

逓信総合博物館

第27回「私のアイデア貯金箱」

コンクール入賞作品展（予定）

11月1日～11日

「セサミストリート展（NHK特別展）」

12月8日～12月24日

交通博物館

特別展「交通博物館80年」—たのしく学ぶ乗り物の殿堂—

9月18日～12月9日

TEPCO銀座館

電気のふるさと～新潟フェア～

11月22日～25日

第6回「エネルギー賞展」グループ展（仮称）

11月29日～12月11日

たばこと塩の博物館

特別展「浮世絵に見る落語～笑いの中のたばこ文化～」

11月3日～12月9日

国立科学博物館

特別展「日本人はるかな旅展」

9月18日～11月11日

企画展「日本の博物図譜」

10月6日～11月11日

特別企画展「化石の美と科学」

12月4日～平成14年2月17日

国立科学博物館附属自然教育園

企画展「森のクラフト」

10月21日～12月24日

東武博物館

特別展「浅草駅開業70周年記念写真展」

10月10日～12月16日

機械産業記念館（TEPIA）

第14回展示「循環型社会を目指す新技術展～豊かなエコライフ

の実現に向けて」パートⅠ

9月14日～12月14日

東京都高尾自然科学博物館

企画展「モミをとりまく生きもの」

7月1日～12月2日

府中市郷土の森博物館

「現代詩人 村野四郎と故郷」

11月3日～25日

馬の博物館

特別展「古今東西くらべ馬」

9月22日～11月11日

横浜こども科学館

企画展「体感！チャレンジ広場」

11月3日～平成14年3月10日

横須賀市自然・人文博物館

特別企画展示「地球科学部門30年の成果」

12月8日～平成14年1月30日

三菱みなとみらい技術館

特別展示「暮らしの中に見る技術」

7月24日～11月25日

神奈川県立生命の星・地球博物館

「地球を見る～宇宙から見た神奈川」

10月20日～12月16日

新潟県立自然科学館

開館20周年記念特別展「サイエンスブック」

11月1日～平成14年1月30日

黒部市吉田科学館

特別展「山から海へ石ころの旅」

9月29日～11月11日

富山県天文学会活動展「星空を追い求めて」

11月17日～平成14年1月14日

北陸電力エネルギー館

メビウスの卵展富山展

11月3日～11日

岐阜県博物館

秋季特別展「七代目団十郎と国貞、国芳～芝居、錦絵、中山道

～」

9月30日～11月4日

中津川市鉱物博物館

第5回企画展「恐竜時代の巨大火砕流—濃飛流紋岩」

7月29日～11月11日

第10回私の展示室「東濃甌穴写真展」

12月2日～平成14年3月10日

ディスカバリーパーク焼津

特別展「トライ！サイエンス」～エネルギーを体験しよう～

12月12日～平成14年2月11日

静岡市立児童会館

特別企画展「ラ・ビレット展～イメージの世界～」

10月20日～11月11日

トヨタ博物館

特別展「日本映画のなかのクルマたち」(仮題)

12月4日～平成14年2月11日

産業技術記念館

「トヨタコレクション展」～日本のモノづくりの源流～

10月16日～12月2日

滋賀県立琵琶湖博物館

企画展示「^{なまず}鯰 一魚が結ぶ琵琶湖と田んぼ」

7月20日～11月25日

大阪市立自然史博物館

特別展「からだ・ふしぎ発見」

10月6日～11月25日

特別展「親子で遊ぶ木とのふれあいワールド」

12月8日～平成14年1月20日

きしわだ自然資料館

特別展「まちの自然誌」

10月23日～12月24日

兵庫県立人と自然の博物館

企画展「地震はなにがおこすのか？」

10月27日～平成14年1月20日

姫路科学館

児童生徒科学作品展

10月6日～11月11日

広島市健康づくりセンター健康科学館

企画展「好き嫌いをなくそうネ」

9月4日～12月2日

広島市交通科学館

企画展「走るメカの今むかし・オートバイ」

9月27日～11月25日

広島市こども文化科学館

「植物画を描いてみよう…ボタニカルアートの世界」

10月24日～11月6日

「広島市児童生徒発明くふう展」

11月9日～18日

「広島県未来の夢絵画展」

11月9日～18日

小学生環境ゴミ問題作文絵画コンクール入賞作品展

11月30日～12月2日

ネイチャーフォト写真展

12月8日～平成14年1月13日

徳島県こども科学館

第2回企画展「宇宙科学と探査衛星」

12月8日～平成14年1月7日

愛媛県立博物館

特別展「愛媛県児童生徒理科研究作品展」

11月4日～11日

防府市青少年科学館

特別企画展「おもしろ化学探検館」

10月20日～11月25日

屋久杉自然館

特別展「屋久杉の森 国有林の時代～近代林業の時代～」

4月25日～平成14年3月31日

鹿児島県立博物館

企画展「鹿児島に生きる竹」

11月2日～平成14年1月20日

歴史体感

ロボットが誘う、歴史伝説の世界

伝統文化の保存と伝承を目的とした施設、建設にも積極的に参加しております。



◀閃光に驚き、バランスを失う武士たち。



▲刀が振り下ろされるその瞬間、目が眩むばかりの閃光が走る。

佐渡歴史伝説館／日蓮聖人 佐渡法難

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・設計・制御演出・施工

kokoro
株式会社 ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>

— 全科協情報 —

○海外科学系博物館視察研修について

平成13年度は次の日程で行います。詳細については、募集要項をご覧ください。

期 間 平成14年1月13日(日)～26日(土)

訪問地域 欧州

訪問予定館 発見の宮殿(フランス)、科学産業都市(フランス)、ライデン博物館(オランダ)、ゾイデル海博物館(オランダ)、ゼンケンベルク博物館(ドイツ)、自然史博物館(オーストリア)、こども博物館(オーストリア)

参加費用 258,000円(25名以上)

270,000円(20～24名)

※正会員館は予算の範囲内で1館あたり50,000円以内の研究援助費が支給される予定です。

○全科協ホームページのデータベースシステムについて

全科協ホームページで公開していた「加盟館園検索」の機能と情報内容を拡充して、各加盟館園が随時、活動情報を更新できるデータベースシステムを平成13年8月から運用していますのでご利用下さい。データベースの作成にあたり実施したアンケート調査には多くの加盟館園にご協力いただきました。ありがとうございました。

なお、情報未登録の館につきましてはホームページから直接登録いただくか、事務局宛にアンケートをご返送下さい。情報更新等には、平成12年9月下旬に配付しましたユーザーIDとパスワードが必要になります。ご不明な点等ありましたら、事務局までご連絡ください。

【ロボフェスタ2001国際フォーラムについて】

ロボット創造国際競技大会中央委員会より標記について参加募集のお知らせがありました。詳細については下記にお問い合わせ下さい。

開催日：平成13年11月24日(土)～25日(日)

会 場：ロボフェスタ神奈川2001 横浜会場

問い合わせ：ロボット創造国際競技大会中央委員会事務局

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。

 株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡

URL <http://www.tanseisha.co.jp>

めざすのは
「小宇宙」の実現です。

 **NOMURA**

株式会社 乃村工芸社

本社/東京都港区芝浦4-6-4 〒108-8565 電話03-3455-1171代
ホームページ <http://www.nomurakougei.co.jp>

ディスプレイおよび建築の調査・コンサルティング・
企画・設計・デザイン・プロデュース・演出・制作施工



INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT

ONY KOBO CO.,LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
TEL (03) 3221-1102代 FAX (03) 3221-1185

動物園/水族館/博物館
企画・設計・施工

全科協ニュース編集委員会

NHK放送博物館 チーフディレクター 河野光子
滋賀県立琵琶湖博物館 企画調整課長 高橋啓一
ミュージアムパーク茨城県自然史博物館

資料課長 都賀和男

国立科学博物館 普及部 普及課長 武田良正
国立科学博物館 普及部 普及課専門職 原田紀子

全科協事務局

国立科学博物館普及部普及課 村上 剛 鈴木千絵

Tel.03-5814-9857・9858 Fax.03-5814-9898

発行日 平成13年11月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社